

最晩年のフジタ 壁画に没頭

熊本で幼少期を過ごし、フランス・パリで一世を風靡した画家藤田嗣治(1886〜1968年)。最晩年、自ら建てた礼拝堂で、キリストの生涯を壁画にした。県立美術館本館(熊本市中央区)で開催中の「ランス美術館展」では、壁画やステンドグラスの素描群を展示。藤田が波瀾万丈の人生をどう締めくくろうとしたのか、うかがうことができる。

十字架を背負って歩くキリスト、キリストを抱きかかえて嘆く人々、十字架に架かったキリストの厳しい表情…。同展には、縦1・5メートルを超え

る原寸大の下絵素描など10点が並ぶ。木炭で描かれた線は力強く、顔のしわや髪の毛のひだまで細かく表現されている。

波瀾万丈の人生締めくくる

藤田は、フランス北東部の町ランスに66年、自身と妻君代さんが永眠するための「平和の聖母礼拝堂」を建設。その内壁に素描の線を写し取り、「降誕」「奇跡」「十字架降下」「復活」など、キリストの生涯を古典技法「フレスコ」で描いたという。ルネサンスの教会壁画で知られるフレスコ画は、壁のしつこい乾かないうちに顔料を重ねて描く。79歳の藤田は毎日10時間以上制作に臨み、3カ月で総面積約100平方メートルの壁画を完成させた。

当時、藤田を訪ねた樋口欣一さん(94)「熊本市」は「藤田先生は『十字架降下』を描いている最中。はしごから降りようとして、よろけたところを抱き止めた」と振り返り、「線はとてもきれいだった」という。

フレスコ画を手掛ける崇城大芸術学部の有田巧教授(64)は「これだけの作品を短期間で仕上げるのは大変だっただろう。徹底した研究がうかがえる。描写に迷いがなく、色調も抑えて礼拝堂たる空間を作っており、まさに集大成だ」という。

東京生まれの藤田は幼少期の10年を熊本で過ごした。1913年に渡仏し、乳白色の下地に描くスタイルを確立。南米でも成功した後、日本に帰国し戦争画(作戦記録画)を制作した。終戦後はアメリカを経て再び渡仏し、55年にフランス国籍を取得。カトリックの洗礼を受け、レオナルド・ダ・ヴィンチに敬意を表し、「レオナルド・フジタ」と名乗った。

藤田は礼拝堂完成後、体調を崩し、療養先のスイス・チューリヒで81歳で亡くなる。なぜ藤田は晩年になりカトリックの洗礼を受けたのか。藤田を研究する県立美術館の村上哲芸芸課長(58)は「戦争を経て、平和を求めて、身も心もフランス人になろうとしたと考えられるが、西欧の美の系譜に自らを置くために洗礼を受けたとの見方もできる」と話す。

古今東西の美を取り入れながら、立ち位置を模索した藤田。村上課長は「1930年代の南米と、戦争画を描いた日本で、藤田は絵画の大衆性を感じた。戦争と平和というテーマも絡めて、今後この時期の研究が必要だ」としている。ランス美術館展は熊日などの主催で、9月4日まで。(中原功一朗)



礼拝堂に壁画を描くための藤田の素描が並ぶ会場。県立美術館本館(大倉尚隆)